

〔書評と紹介〕

『南郷村誌』

畠 山 雄 公

明治二十二年の町村制施行により島守村と中沢村が生まれ、昭和三十一年の市町村合併促進法により両村は翌年合併して南郷村が誕生した。同村教育委員会ではすでに十周年記念事業として昭和四十七年「南郷村史」を発行していたが、この度三十周年記念事業として本書（全一卷、八八七ページ）が刊行された。構成は以下の通りである。

口絵（カラー写真四ページ）  
南郷村誌発刊にあたって ..... 南郷村長 壬生 末吉  
監修のことは ..... 小井田幸哉

第一章 村の境域  
第二章 村のあゆみ  
第一編 自然（口絵カラー写真七ページ、本文一四七ページ）

第一章 地形  
第二章 地質  
第三章 気候  
第四章 生物  
第一節 植物  
第二節 動物

所見

第二編 原始時代（口絵カラー写真四ページ、本文四八ページ）

第一章 縄文文化

第二章 新しい文化のおとずれ

第三編 歴史時代（口絵カラー写真四ページ、本文四一九ページ）

第一章 古代（二三ページ）

第一節 奈良・平安時代

第二節 糠部郡と九戸四門制

第二章 中世（一〇二ページ）

第一節 鎌倉時代

第二節 南北朝時代

第三節 室町時代

第四節 安土・桃山時代

第五節 中世の城館跡

第三章 近世（一六〇ページ）

第一節 南部藩政の時代

第二節 八戸藩政の推移

第三節 八戸藩の形

第四節 村の暮らし

第四章 近代（一三四ページ）

第一節 明治維新の変革

第二節 明治維新後の南郷村の変遷概要

第三節 戦争と南郷村の戦没者

第四節 南郷村の警察

第五節 南郷村の人口

第六節 集落の分布状況

第七節 南郷村の産業

第八節 村税の状況

第九節 村議会議員、各種委員

第十節 南郷村の年譜

第四編 教育（口絵カラー写真四ページ、本文六七ページ）

第一章 藩政時代の教育

第二章 寺子屋、私塾の教育

第三章 村内小学校の沿革概要

第四章 村内中学校の沿革概要

第五章 南郷高等学校の沿革概要

第六章 幼児教育の沿革概要

第七章 社会教育の沿革概要

第五編 民俗（口絵カラー写真四ページ、本文二三八ページ）

第一章 民俗信仰

第二章 民俗芸能

第三章 年中行事

第四章 人の一生

第五章 村の方言

第六章 住居

第六編 文化財（口絵カラー写真四ページ、本文二四四ページ）

第一章 国・県指定の文化財

第二章 村のすぐれた文化財

編纂を終えて

旧書の「南郷村史」は江戸時代の南郷村域に関する出来事を主として八戸藩御日記から拾い集め、それを編年順にまとめたものである。それに対し本書は構成を見ても分かるように、歴史のみでなく（歴史編に全体の半分近いページを割いている）、地形・地質・気候などの自然から教育や民俗まで幅広く取り上げており、いわば南郷村の百科辞典的「村誌」と言ってよい。

以下通読して感じたことを若干述べてみたい。

第一に、歴史編（近代を除く）の記述であるが非常に分かりやすく、多くの読者にとっては地域の歴史入門の手引書になるのではない。簡明で分かりやすく説得力のある記述になっているのは、執筆者の三つの基本姿勢にあると思う。一つは歴史研究の常道であるが、あくまで史料に立脚して史実の解明にあたっている点である。異論や異説の多い「九戸四門制」や「糠部郡」の考証は、従来の説を踏まえながらも広く史料にあたり論を進めており説得力がある。また「安藤きぬ女類族交名」「入道跡注文」など原典史料の写真とともに解説もされており、中世糠部地方の庶民生活を史料から実証している。二点目は史実と伝承を明確に区別しながらも、伝承・伝説の背景を踏まえて記述している点である。南部氏の糠部地方への関わりについての記述がその好例である。三点目は中央の政治・社会の大きな流れの中で中世糠部地域の動向や、近世南部藩・八戸藩政の推移を的確に把握し記述していることである。中世の糠部地方を支配した八戸根城南部氏と三戸南部氏との関係を、惣領制とその解体変化のなかでとらえているのは説得力がある。また近世は南部

藩政・八戸藩政の推移を幕末まで概説してから、八戸藩の支配機構・財政構造・村の暮らしなど庶民生活の細部まで記述しており、江戸時代の南郷村域が全体的に理解できるように配慮されている。

第二は民俗や動植物などに関する貴重な記録が採録されていることである。高度な情報化社会、近代的な生活、押し寄せる開発の波は、今や南郷村でも例外ではない。古民家の調査記録や、盆踊り歌・わらべ歌・くどき歌などの俗謡、年中行事・人の一生に関する儀礼など、同じ村域の中でも微妙に異なる点まで採録したことは、後世に大きな財産となるのではないか。

第三は考古学や歴史考古学への期待である。南郷村域は二二〇余の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、県内でも有数の遺跡数を持つ。今後これら遺跡の発掘が進むと、より詳しい縄文・弥生時代の生活が知られるであろう。また中世城館跡の学術的な調査発掘も期待される。村域には島守館跡・中野館跡・世増館跡・頃巻沢館跡・狛館跡が確認されている。文献史料の少ない中世では、これら城館跡の本格的な調査発掘によって「借り物」ではない、真の意味でのその地域の歴史が解明されるのである。

最後に本書を読んで気にかかった点をいくつかあげたい。一つは用語の問題である。鎌倉幕府の公式記録書は「吾妻鏡」（東鑑）であるが、本書では「吾妻鏡」と「吾妻鑑」の記述が見られる。誤植であればよいのだが。また室町幕府が鎌倉に設置した鎌倉府Ⅱ関東府の長官を関東管領としているが、鎌倉公方（鎌倉殿・鎌倉御所）ではないか（一般読者を対象とした時、用語に複数の表記がある場合、一般的なものを使用し

他は（ ）に記した方が良いのではないか）。二点目は近代史の記述である。近代の一村域を記述するのは並大抵ではないと十分承知しているが、それでも本村の近代史の中で特筆される事象をいくつか叙述して欲しいものである。たとえば産業の中で重要な地位を占める「葉たばこ」栽培の変遷や、昭和十年代から三十年代前半にかけて南氷洋の捕鯨船員として本村から多くの人が出稼ぎに行き「クジラの村」と言われたことなどは叙述対象となるのではないか。三点目は方言について。本書では方言の特質を考察した論文を掲載しているが、論考の材料となった言葉など、具体的な方言を村内の地区別に載せて欲しかった。急速に失われつつある方言は早急に採録しないと手後れになるだろう。

評者は以前南郷高校に在職していた時、クラブ活動で「地域研究」を担当したことがある。村内の生徒ばかりなので、皆で南郷村の歴史を調べようと「南郷村史」を紐解いたのであるが、前述したように近世の村域に関する記録の編年順の記載であるため、途中で投げ出した記憶がある。自治体史（誌）の目的が地域の歴史・文化・民俗・自然などの理解を深化させることにあるとすれば、本書はその目的を十分に達するものである。中・高校生から一般読者まで、どの分野からでも読み進むことができ、南郷村を総合的に理解するため、大いに活用されることを切に願うものである。

（A5 刊 南郷村誌編纂委員会刊 一九九五年六月刊）  
（はたけやま・ゆうこう 八戸南高校教諭）